昭和二十一年三月七日　翻刻印刷
昭和二十一年三月廿五日　翻刻發行
（文部省檢定濟　昭和二十一年三月七日文部省檢定濟）

初等科國語五　第五學年前期用（第一分冊）
定價　金五拾錢

著作兼發行者　文部省
著作權所有

東京都王子區滝船町一丁目八五七番地
翻刻發行兼印刷者　東京書籍株式會社
代表者　井上源之丞

東京都王子區滝船町一丁目八五七番地
印刷所　東京書籍株式會社

Approved by Ministry of Education
(Date Mar. 7, 1946.)

東京都王子區滝船町一丁目八五七番地
發行所　東京書籍株式會社

先生の聲援がありがたかつた。ぼくは、むちゆうで腕と足を動かした。

ふと氣がつくと、小島くんの姿が見えない。何だか一人取り殘されたやうな、さびしい氣持になる。その氣持を拂ひのけるやうに、手足に力を入れようとしたが、力がはいらない。水の中で、もがいてゐるやうである。顔を水にひたして、からだを浮かすやうにして泳いだ。一本松を見たが、まだかなり遠いところで手招きをしてゐるやうだ。手足が、石のやうにこはばつて來る。先頭からは、どんどんおくれて行く。もう、だめだ。警備船へあがらうか。

「廣田、おくれたつてかまはない。ゆつくり泳げ。」

と、船の上から先生が叫ばれた。ぼくは、自分の弱い心持が恥づかしくなつた。おくれたつて、ほかの人がやめたつて、ぼくだけは、最後までどうしても泳がう——それからは、何も考へないで、まるで機械のやうに手足を動かした。

一本松が、右手の海岸のがけの上に、大きく立つてゐるのが見えた。もう一息だと力を出した時、ふしぎにからだは、すいすいと前の方へ輕く進んで行つた。がけの下をぐるつとまはると、今まで見えなかつた島の裏側の海岸が、見えて來た。靑々とした木が、鏡のやうに靜かな海面に影を投げかけてゐる。その向かふに、眞一文字に白い線を引いたやうな砂濱が、目にしみるやうに寫つた。

「廣田よくやつた。もう大丈夫だ。潮の流れもいいし。そら、あそこに見えるだらう、あの砂濱が、到着點だ。」

ぼくは、全身の力を腕と足とにこめて、遠い砂濱をめがけて、元氣よく泳いで行つた。

八　海底を行く

目の前に、
關門海峽はさざ波をたたへ、
車窓から何百の船が見える。
「おかあさん、
　あの海峽をくぐるのね。」

汽車はたちまちトンネルにはいつた、
ざあつとすべつて行く車輪の響き。
「おかあさん、
　今、海の底を走つてゐるのね。」

本州と九州の握手だ、
日本最初の海底トンネルだ。
「おかあさん、
　まるでおとぎ話のやうね。」

だいじな物資や、郵便物や、
私たちを一氣に運んでくれる。
「ありがたいぢやありませんか。
　命がけでほつたおかげですよ。」

ふり返ると、
關門海峽はさざ波をたたへ、
いそがしさうに船が動いてゐる。
「おかあさん、
　あの下を通つて來たのね。」

九　秋のおとづれ

秋は虫の聲から始る。
盛夏は、まだ暑い暑いの底聲出田をうい[illegible]

越せば、どこかに秋らしいものが見えてもよさそうなものである。それだのに、寒暖計は三十度を越えたがる。暑さは、もうたくさんだといひたくなる。するとある日の午後、裏山の森で、「つくつくぼうし、つくつくぼうし。」の聲を聞いた。

暑い日がやつと暮れても、よひの間は家の中がむつとして、柱も壁も、さはるとどうやら熱氣を吐いてゐる。二階へあがつてみても、さして涼しい風はなささうである。ただ晴れた夜空に星がきらきらとさえ、銀河があざやかに中天にかかつてゐる。その時ふと耳にするものは、前の草原で鳴く虫の聲である。それがはたして何虫であるか、はつきりはしないが、かなりたくさんの聲であることを感じる。夜がふけると、思ひなしか屋根瓦が少ししめつて來る。

夜の燈火をしたつて來る虫は、蛾や、こがね虫など、どれもこれもただうるさいだけであるのに、どこからかて「すいつちよ、すいつちよ。」をくり返す。このくらゐあいきやうのある氣のきいた虫は、めつたにないものだ。さうして、それが、しきりに「秋だ、秋だ。」と鳴きたてるやうに思はれる。

もう何といつても秋である。よし晝間はどんなに暑からうとも、日光はかすかに黄色味を帶びて、壁やへいの強い反射がいくぶんやはらいで見える。梢吹く風が、思ひ出したやうに、ざわざわと音をたてる。背戸のみぞ端に、秋海棠がかはいらしい薄赤の花をつける。畠のにらの花に、頭でつかちないちもじせせりが飛びちがふ。何よりも、たんぼに早稲の穂が出そろつて白く波打つのが秋らしく見渡される。

やがて二百十日が來て、農家はただ風ばかりを心配する。夜は、そろそろこほろぎが家の中へはいて、床の下や壁の中で聲高く鳴きたてる。

十　武士のおもかげ

かりまたの矢

義家、ある日安倍の宗任らをつれて、廣き野を過ぎ行きしに、きつね一匹走り出でたり。義家、背に負ひたるうつぼより、かりまたの矢を抜きて弓につがへ、きつねを追ひかけしが、殺さんもふびんと思ひて、左右の耳の間をねらひてひようと射る。矢は、あやまたず頭上をすれすれにかすめて、きつねの前なる土に立ち、きつねは、その矢につき當りて倒れたり。

宗任、馬よりおりてきつねを引きあげながら、

「矢は當らぬに、死にて候。」

と申せば、義家、

「おどろきて死にたるなり。捨ておかば、ほどなく生き返るべし。」

と申せば、宗任、すなはち矢を取りてさし出せば、義家、背を向けてうつぼにささせけり。宗任はもと賊電の頭にて、近ごろ降りし者なれば、他の家來どもこのさまを見て、

「危きことかな。するどき矢をささしめたまふことよ。もし、宗任に惡しき心もあらば。」

とて、手に汗をにぎりけり。

障子張り

相模守時頼の母を、松下禪尼といへり。時頼を招くことありけるに、すすけたる障子の破れを、禪尼、てづから小刀にて切りまはしつつ張りゐたり。城介義景、これを見て、

「その障子をこなたへたまはりて、なにがしに張らせ候はん。さやうのことに、なれたるものにて候。」

と申しければ、禪尼、

「その男、尼が細工にはよもまさり候はじ。」

と重ねていへば、

「尼も、のちには新しく張りかへんとは思へど、すべて物は破れたるところをつくろへば、しばらくは用をなすものぞと、若き人に見ならはせんとて、かくするなり。」

といひけり。

馬ぞろへ

山内一豐、織田家に仕へし初め、東國第一の名馬なりとて、安土に引き來て商なふものあり。信長の家臣らこれを見るに、まことにならびなき馬なり。されど價あまりに高くして、買ふもの一人もなく、空しく引き歸らんとす。

一豐もこの馬ほしく思へど、求むることいかにもかなふべからず。家に歸りて、

一豐、仕への初めなり。かかる名馬に乘りて見參に入れたらんには、主君の御感にもあづかるべきものを。」

とひとりごといひしに、妻つくづくと聞きて、

「その馬の價は、いかばかりにや。」

と問ふ。

「黄金十兩とこそいひつれ。」

「さほどに思ひたまはば、その馬求めたまへ。價をば、みづからまゐらすべし。」

とて、鏡の箱の底より黄金十兩を取り出す。

一豐、大きにおどろきて、

「この年ごろ身貧しく、蓄しさのみ多かりしに、その黄金ありとも知らせたまはず。されば、今この馬、ゆめにも求め得べしとは思はざりき。」

と喜び、またうらむ。妻、

「のたまふところ、ことわりはこそ。されどこれは、わらはこの家にまゐりし時、この鏡の下に父の入れたま

ひて、ゆめゆめ、世のつねのことに用ふべからず。汝の夫の一大事あらん時にまゐらせよとて、たまひき。されば、家貧しくして苦しむなどは、世のつねのことなり。まことにや、都にて御馬ぞろへあるべしなど聞ゆ。君は仕への初めなり。良き馬にめして、主君の御感にあづかりたまへ。」

といふ。

一豐、すなはちその馬を求めたり。

やがて馬ぞろへの日とはなれり。いづれおとらぬ馬多く集りたる中に、一きは目だちてたくましきを信長うち見て、

「あつぱれ、名馬。たれの馬ぞ。」

と問へば、家臣答へて、

「これは東國第一の名馬とて、商人の引きてまゐりしを、一豐が求め得たるものに候。」

と申す。信長、

「一豐は世へて目なき武士なり、家も貧しからんに、よくも

かかる名馬を求めたるぞ。見あげたる志。」

と、しばし感じてやまざりけり。

十一　弟橘媛

日本武尊、相模の國より御船にて上總へ渡りたまふ。

にはかに風起り波たちさわぎて、御船進まず。從者みな、船底におそれ伏したり。

尊に從ひたまへる后、弟橘媛、「これ海神のたたりなるべし。かくては御命も危からん。」と思ひたまひて、尊に申したまふやう、

「われ、皇子に代りて海に入り、海神の心をなだめん。皇子は勅命を果して、めでたくかへりごと申させたまへ。」

と申したまひて、すがだたみ八重、皮だたみ八重、さぬだたみ八重を波の上に敷きて、その上にのりたまへり。

ほたして荒波おのづから靜まりて、御船は進むことを得たり。

七日ののち、后の御櫛ただよひて海べに寄りぬ。尊、これををさめて、后のみはかを作らせたまふ。

東國の賊を平げて、尊、西へ歸りたまふ時、相模の足柄山を越えたまふ。はるかに海を望みたまひて、

「あづまはや。」

とのたまひぬ。これよりのち、このわたりを廣く「あづま」といふとぞ。

十二　稻むらの火

「これは、ただごとでない。」

とつぶやきながら、五兵衛は家から出て來た。今の地震は、別に激しいといふほどのものではなかつた。しかし、長い、ゆつたりとしたゆれ方と、うなるやうな地鳴りとは、年取つた五兵衛に、今まで經驗したことのない、無氣味なものであつた。

五兵衛は、自分の家の庭から、心配さうに下の村を見おろした。村では、豐年を祝ふよひ祭の支度に心を取られて、さつきの地震には、一向氣がつかないもののやうである。

村から海へ移した五兵衛の目は、たちまちそこに吸ひつけられてしまつた。風とは反對に、波が沖へ沖へと動いて、見る見る海岸には、廣い砂原や、黑い岩底が現れて來た。

「大變だ。津波がやつて來るに違ひない。」と、五兵衛は思つた。このままにしておいたら、四百の命が、村もろとも一のみにやられてしまふ。もう一刻もぐづぐづしてはゐられない。

「よし。」

と叫んで、家へかけ込んだ五兵衛は、大きなたいまつを持つてとび出して來た。そこには、取り入れるばかりになつてゐるたくさんの稻束が積んである。

「もつたいないが、これで村中の命が救へるのだ。」

と、五兵衛は、いきなりその稲むらの一つに火を移した。風にあふられて、火の手がぱつとあがつた。一つまた一つ、五兵衛はむちゆうで走つた。かうして、自分の田のすべての稲むらに火をつけてしまふと、たいまつを捨てた。まるで失神したやうに、かれはそこに突つ立つたまま、沖の方を眺めてゐた。

日はすでに沒して、あたりがだんだん薄暗くなつて來た。稲むらの火は天をこがした。山寺ではこの火を見て早鐘をつき出した。

「火事だ。莊屋さんの家だ。」

と、村の若い者は、急いで山手へかけ出した。續いて、老人も、女も、子どもも若者のあとを追ふやうにかけ出した。

高臺から見おろしてゐる五兵衛の目には、それが蟻の歩みのやうにもどかしく思はれた。やつと二十人ほどの若者が、かけあがつて來た。かれらは、すぐ火を消しに

かからうとする。五兵衛は、大聲にいつた。

「うつちやつておけ——大變だ。村中の人に來てもらふんだ。」

村中の人は、おひおひ集つて來た。五兵衛は、あとからあとからのぼつて來る老幼男女を、一人一人數へた。集つて來た人々は、もえてゐる稲むらと五兵衛の顔とを、代る代る見くらべた。

その時、五兵衛は、力いつぱいの聲で叫んだ。

「見ろ。やつて來たぞ。」

たそがれの薄明かりをすかして、五兵衛の指さす方を一同は見た。遠く海の端に、細い、暗い、一筋の線が見えた。その線は、見る見る太くなつた。廣くなつた。非常な速さで押し寄せて來た。

「津波だ。」

と、だれかが叫んだ。海水が、絶壁のやうに目の前にせまつたと思ふと、山がのしかかつて來たやうな重さと、百雷の一時に落ちたやうなとどろきとで、陸にぶつかつた。人々は、われを忘れて街へ走り、山へ走り、高臺へ走り、山手へ突進して來た水煙のほかは、一時何物も見えなかつた。

人々は、自分らの村の上を荒れくるつて通る、白い、恐しい海を見た。二度三度、村の上を、海は進みまた退いた。

高臺ではしばらく何の話し聲もなかつた。一同は、波にゑぐり取られてあとかたもなくなつた村をただあきれて見おろしてゐた。

稲むらの火は風にあふられてまたもえあがり、夕やみに包まれたあたりを明かるくした。始めてわれにかへつた村人は、この火によつて救はれたのだと氣がつくと、ただだまつて、五兵衛の前にひざまづいてしまつた。

十三　月の世界

望遠鏡で見た月

學校の門を出ると、正男くんがばくにかういつた。

「どうして。」

「にいさんが天體望遠鏡を作つたんだ。」

「ほう。」

「月がすばらしいよ。よかつたら見に來たまへ。」

夕方、まだ明かるい空に、半月が光り始めた。おかあさんにさういつて、夕飯がすむと、すぐ出かけた。

行つてみると、正男くんのうちでは、もう縁先に望遠鏡をすゑつけて、にいさんと正男くんが、代る代る觀測をしてゐる。長さ一メートルばかりの望遠鏡が、三脚の上にのつてゐる。

「りつぱな望遠鏡ですね。」

と、ぼくがにいさんにいふと、正男くんは、

「これでにいさんのお手製なんだ。見たまへ、筒はボール紙だらう。三脚は、やつときのふできあがつた。ぼくも、すゑぶん手傳つたよ。」

「レンズは。」

「買つたのさ。レンズは、だいぶ上等なんだ。」

正男くんは、さも自分で買つたやうな口振りでいふ。にいさんは、初めからにこにこしながらだまつてゐた。

「さあ、きみものぞいてごらん。」

と、正男くんにいはれて、ぼくは望遠鏡に目を近寄せた。

望遠鏡の圓い視野に、月がくつきりと浮き出して見える。それは肉眼で見るのとすつかり感じが違つて、今に露でもしたたりさうな、なまなましい、あざやかな美しさである。

「きれいだなあ。」

ぼくが思はず叫ぶと、正男くんが。

「きれいだらう。」

と、あひづちを打つやうにいふ。だが、よく見ると、月の表面は決してなめらかではない。一面にざらざらした[illegible]

[illegible]

の巣を思はせるやうなでこぼこが、目立つて見える。

「月の顔には、すゐぶんあばたがあるね。」

と、ぼくがいつたので、にいさんも正男くんも、笑つた。

それからも、三人代る代るのぞきながら、にいさんからおもしろい説明を聞いた。

にいさんの説明

あのあばたのやうに見えるのは、大部分が火山で、穴は噴火口です。こんな小さな望遠鏡でさへ、はつきり見えるのですから、噴火口は、非常に大きなものだといふことが考へられます。いちばん大きなのは、直徑が二百キロもあるといはれてゐます。かうした火山は、どれもこれもけはしくて、低いのでも三百メートル、高いのになると八千メートル——富士山の二倍以上もあるのがあります。もちろん、月は地球と違つて、とつくの昔、すつかり冷えてしまつた天體ですから、火山といつても、みんな死火山ですがね。

それから、よく見なさい。[illegible]

點のやうなものがあるでせう。あれは海といはれる部分ですが、月には水が一しづくもありませんから、海といふより、平原といつた方がよいかも知れません。たぶん、昔、このたくさんな火山からふき出した熔岩が、流れて固まつたものでせう。

月には水がないといひましたが、水ばかりか空氣もないのです。したがつて、雲や、雨や、あらしや、さういつた、この地球上に見られる氣象現象は、一つもありません。月は、いつも晴天なのです。この望遠鏡で見てもわかるやうに、月のどこ一つくもつたところがないのが、その證據です。しかも、空氣も水もないとすると、地球上のやうに、太陽から來る光や熱を調節するものがないから、月の世界では、晝はこげつくやうな暑さ、夜はその反對に、ひどい寒さであらうと思はれます。

まだおもしろいことがあります。かりに、私たちが月の世界へ行つたとすると、そのけしきはどんなものでせう。今もいふやうに、光を調節するものがないから、太陽に照らされた部分は、目が痛いほど光つて見えるでせうが、陰になる部分は、きつと眞黑に見えるに違ひない。ごつごつした火山が、到るところにそびえて、それが眞黑な大空に突つ立つてゐるとしたら、どんなに恐しいけしきでせう。もちろん、草も木もありませんよ。その代り、一つうらやましいと思ふのは、月から見た地球の美觀です。地球の直徑は、月の約四倍ありますから、夜、月から地球を見るとすると、われわれが常に見る月の四倍ぐらゐな地球が、天にかかつて見えるわけです。

かういふふうに、月の世界は、いはばまつたく恐しい死の世界ですが、それでゐて、昔から月ほどやさしい、平和な氣持を與へてくれるものはありません。その青白い、しみじみと親しめる光が、われわれに大きな慰めを與へるからです。殊に日本では、昔から月と文學が、まつたく離れられないものになつてゐます。ごらんなさい、歌でも、俳句でも、詩でも、月に關するものがどんなに多いか。月の世界に都があつて、そこで天人が舞つ

てゐるなどは、實に美しい想像ですね。今日私たちは、それが死の世界であると知つても、やはり月がなかつたらさびしい。峯の月、大海原の月、椰子の木かげの月、さういふものがないとしたら、ほとんど生きがひがないと思ふでせう。月は、永久に人間の心の友であり、慰めであります。

十四　柿の色

かま場より出でし喜三右衛門は、しばし縁先にやすらひぬ。

日は、やや西に傾けり。仰げば庭前の柿の梢は、大空に墨繪をゑがき、すずなりの赤き實、夕日を浴びて、さながら珊瑚珠のかがやくに似たり。この美しさに、しばし見とれたる喜三右衛門は、ふと何思ひけん、

「おお、それよ。」

とつぶやきて、直ちにまたかま場へ引き返しぬ。

その日より、喜三右衛門は、赤色の焼きつけに熱中し始めたり。されど、めざす色はたやすく現るべくもあらず、いたづらに焼きてはくだき、くだきては焼き、はてはただばう然として、歎息するばかりなり。

苦心は、それのみにあらざりき。研究に費す金はしだいにかさみ、しかも工夫に心をうばはれては、おのづから家業もおろそかならざるを得ず。やがて、その日の生計も立ちがたく、弟子たちもこの師を見かぎり去りて、手助けをする者一人もなし。人はこの様を見て、たはけとあざけり、氣違ひとののしる。されど、喜三右衛門は、動かざること山のごとく、一念ただ夕日に映ゆる柿の色を求めて止まざりき。

かくて數年は過ぎたり。ある日の夕べ、あわただしくかま場より走り出でたるかれは、

「たき木、たき木。」

と叫びつつ、手當りしだいに物を運びて、かまの火にことごとく投じたりき。

その夜、喜三右衛門は、かまのかたはらを離れざりき。鶏の聲を聞きては、はや心も心にあらず。かまの周圍を、ぐるぐるとめぐり歩きぬ。

夜は、やうやく明けはなれたり。胸ををどらせつつ、やをらかまを開かんとすれば、今しも朝日、はなやかにさし出でて、かま場を照らせり。

一つまた一つ、血走る眼に見つめつつ、かまより皿を取り出しゐたるかれは、やがて、「おお。」と力ある聲に叫びて、立ちあがりぬ。

ああ、多年の苦心は、つひに報いられたり。かれは、一枚の皿を兩手にささげて、しばしかま場にこをどりしぬ。

喜三右衛門は、やがて名を柿右衛門と改めたり。

柿右衛門は、今より三百餘年前、肥前の有田に出でし陶工なり。かれは、その後いよいよ研究を重ね、工夫を積みて、つひに柿右衛門風と呼ばるる、精巧なる陶器を製作するにいたれり。その作品は、ひとりわが國にもてはやさるるのみならず、遠く海外にも傳はりて、名工のほまれはなはだ高し。

十五　初冬二題

ゆず

今年も、隣りのゆずが黄ばんだ。
かんとさえた冬空、
太陽が、まぶしく仰がれる。

かさこそと、
竹竿であの木の梢をつついてゐた
隣りのをぢさんは、今ゐない。
からたちの垣根越しに、ふとほほ笑んで、
「あげようか。」と、投げてくれた
をぢさんは、よい人だつた。
あの時、ざくつとおや指を皮に突き立てたら、

しゆつと、しぶきがほとばしつて、
爪を黄いろく染めたものだつた。

なつかしいゆずのかをり、
わ[illegible]しは、じつと梢を仰ぎ見た、
今は轉任して、
遠くへ行つてしまつたをちさんを思ひながら。

朝　飯

新づけの白菜、
何といふみづみづしさであらう。
かめば、さくさくと歯切れよく、
朝の氣分を新たにする。

父も、母も、兄も、妹も、
だまつて箸を動かしてゐる。
そろつて健康に働く家族の、
楽しい朝飯だと思へば、
あたたかい御飯の湯氣が、
幸福に、私たちの顔を打つ。

明けて行く朝、
窓ガラス越しに、林が黑い。
からからと、どこかで荷車の音。
白い御飯から、
あたたかいみそ汁から、
ほかほかと、立ちのぼる湯氣を見つめながら、
私は、さくさくと白菜をかむ。

十六　豐田佐吉

「機ばかりいじつてゐて、をかしなやつだ。男のくせに。」
豐田佐吉は、村の人々から、かういつてあざけられた。
佐吉は、父の大工の仕事を助けて働いてゐたが、ひまさ

「いよいよ、あれは氣違ひだ。」
村中にこんなうはさがひろがると、父も、だまつてはゐなかつた。
「おまへは大工のせがれだ。ほかのことを考へないで、みつしり仕事をやつてくれ。」
とさとしたが、佐吉のもえるやうな研究熱は、どうすることもできなかつた。父は、とうとう佐吉をよその大工の家にあづけてしまつた。
この間に立つて、佐吉を勵ましたり、慰めたりしてくれたのは、母であつた。佐吉は、「今にきつと成功してみせます。しばらくお許しください。」と、心の中で深く兩親にわびた。
佐吉の考へは、かうであつた。人間の衣食住といふものは、みんな大切なものであるから、布を織る仕事も、決してゆるがせにしてはおかれない。今のやうな仕方では、みんながきつと困る時が來るに違ひない。それにならないといふのである。
佐吉が、最初目をつけたのは、布を織る時、たて糸の間を縫つて行くよこ糸であつた。よこ糸は杼によつて、右から左、左から右へと往復するのであるが、これを人の手によらず、機械の力で動かすやうに工夫したかつた。機械で動かせば、もつと早く往復するやうな仕組みになるだらう。更に進んでは、ひとりでに、布がぐんぐん織られて行くやうにもなるであらう。次から次へと、佐吉の考へは高まつて行つたが、わづか小學校を出ただけのかれには、ややもすれば、手のとどきさうもない空想になりがちであつた。
たまたま、そのころ東京に博覽會が開かれた。佐吉は上京して、目をかがやかしながら、その機械館へ毎日通つた。銀色に光つたたくさんの機械は、まるで生き物のやうに動いてゐた。かれは、その精巧な機械を見て感心するとともに、何ともいへない肩身のせまい思ひがし

た。機械は、どれ一つとして、わが日本製のものでなかつたからである。

「こんなことでいいのか。日本の將來をどうするのだ。」

佐吉は、もうじつとしてゐられなくなつた。

せめて自分のめざしてゐる織機を仕あげて、いつかは、外國を見返してやらうと固く決心した。

それからは、ほとんど晝も夜もなかつた。設計圖を引いては、組み立てた。組み立てては、それを動かしてみた。だが、思ふやうに動くものは、なかなか生まれて來なかつた。佐吉は、一軒の納屋に閉ぢこもつて、一心に考へぬき、これならといふ一臺の織機を作りあげたが、これもまんまと失敗であつた。世間からは、ますます笑はれて、だれ一人相手にさへしなくなる。貧しさは、ひしひしと身にせまつて來る。しかし、佐吉は、「このくらゐのことで弱るものか。」と、新しい勇氣をふるつて立ちあがつた。

昭和二十一年四月十六日　翻刻印刷
昭和二十一年五月十日　翻刻發行
（檢印省略）
（昭和二十一年四月十六日文部省令第五號）

初等科國語五　第五學年前期用（第三分冊）
新　定價　金參拾五錢

著作權所有　著作兼發行者　文部省

翻刻發行兼印刷者　東京都王子區堀船町一丁目八五七番地
東京書籍株式會社
代表者　井上源之丞

印刷所　東京都王子區堀船町一丁目八五七番地
東京書籍株式會社

Approved by Ministry of Education
(Date Apr. 16, 1946.)

發行所　東京都王子區堀船町一丁目八五七番地
東京書籍株式會社

よつて、こまかなところまで作り直して行つた。今までの失敗の原因を、みんな取り除いて、面目を一新した設計圖ができあがつた。さつそく、その組み立てに取りかかり、苦心の末、やつと思ひ通りの織機ができあがつた。駿してみると、はたしてよく動いた。

この織機を、村の人々の前で、試運轉する日がやつて來た。黒山のやうに集つた人たちは、布をみごとに織つて行くふしぎな機械に目を見張つた。

「よくやつた。えらいものだ。」

みんなは、かういつてほめたたへた。この日、佐吉の織機を操つて、りつぱに布を織つてみせた人こそ、佐吉の母であつた。明治二十三年、佐吉が二十四歳の時のことである。

翌年、特許を得た。豐田式人力織機は、盛んに國内に使用されるやうになつた。しかも、かれはこれに滿足せず、すぐ動力機械の製造にとりかかつた。人の力から、機械の力に移すといふ、多年の夢を實現しようといふのである。そこで、更に七年間の工夫が續けられ、みごと佐吉の自動織機が完成された。これが、日本における自動織機の始祖である。

この自動織機の出現によつて、日本は、あつぱれ綿布工業國として、世界に乘り出すやうになつた。

何千臺といふ自動織機が勢ぞろひをして、いつせいに活動し、すばらしい速さで織り出す光景は、見るからに壯觀である。